

オカルティズムの起源とエリファス・レヴィ

岡本 倫典

「当節言葉の持つ威力。今を時めく造語の種は世にも尽くまい！ 文学にあつてはロマンティズムにナチュラリズム。政治にあつてはオポルチュニズムにアントランシジャンス、宗教にあつてはリベラリズム、クレリカリズムにユルトラモンタニズム。哲学にあつてはポジティヴィスム、マテリアリスムにスピリチュアリズム¹。」1879年の日記に嘆くミュニエ神父であるが、いかにも十九世紀はネオロジスムの世紀であった。言い立てられた例の形を見てのとおり、このことは-ismeのややもすると見境のない造語力に負うところが少なくない。ギリシア語-ismosに端を発する後期ラテン語-ismusは、「〜化する」を意味する動詞から名詞派生語を作り出すための接尾辞に過ぎなかったのが、フランス語-ismeとなり、時十九世紀に至るや、もはや留まるところを知らないその活性を猛然揮い始めたのであった。「十九世紀前半に政治経済哲学用語を形成することにかけてすこぶる旺盛であった-ismeは、後には語彙全般にわたって用いられるようになった²。」

もとより新しい草袋に入っているからといって、それが新しいぶどう酒であるとは限らない。ビンテージ物の密造酒が注ぎこまれた結果、新しい草袋が張り裂けてしまうような事態も往々起こったのである。例えば社会主義という言葉が、ピエール・ルルーによって個人主義の対義語としての明確な意味を与えられたのは1833年のことに過ぎない³。しかるに九十年の後、ブッチ決起を前に勇み立つヒトラーは昂然として謳う、「社会主義はアーリア・ゲルマン民族古来の伝統です⁴。」十九世紀西欧発祥の新語であるはずが時間的にも空間的にも引き延ばされて、はち切れそうな外延とは裏腹に内包はすっかり飛んでしまったかのごとくである。と同時に、マヌ法典の美しい秩序を即ヨーロッパ新秩序たらしめようとするお門違いの本歌取りこそが、ヒトラー主義の思想的真骨頂であったのは疑われない。オカルティズムという新造語をいざれ待ち掛けていたのもまた同様の運命であったことは、エリファ

¹ Abbé Mugnier, *Journal (1879-1939)*, le 28 août 1879, *Mercure de France*, 2003, p. 30.

² Alain Rey, *Dictionnaire historique de la langue française*, Le Robert, 2016, pp. 1182-1183.

³ Cf. André Lalande, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, PUF, 2010, pp. 1276-1277.

⁴ Eric Branca, *Les Entretiens oubliés d'Hitler 1923-1940*, Perrin, 2019, p. 109.

ス・レヴィにして既にウパニシャッドを「インドのオカルティズム書⁵」と称している事態からも窺われる。オカルティズムのこうした普遍化は、すっかり尾羽打ち枯らしたエリファス・レヴィの窮死と時を同じくして勃興した「西伝仏教」神智学協会に大いに裨益するところとなるであろう。

たがの外れた-ismeの勢威が隠秘哲学用語にまで波及したとき、オカルティズムとともに生まれ出た語もまた数多いが、今思い付くままに挙げてみれば、エゾテリズムにエグゾテリズム、カバリズムにエルメティスム、マルティニスムにスピリティスム等々。エゾテリズムとエグゾテリズムは、古代ギリシア哲学、なかんずくピュタゴラスの教えの顕密の別を表わす形容詞エゾテリックとエグゾテリックに発する言葉である。カバリズムとエルメティスムは、いずれもユダヤ教およびキリスト教カバラあるいはヘルメスの伝統という、多かれ少なかれ歴史的に判明な思潮と実践を背景としている。マルティニスムとスピリティスムとは、それぞれマルティネス・ド・パスカリないしはサン・マルタンとアラン・カルデックによって開かれた法統を指すための新発明の語である。ではオカルティズムとは何なのか。対となる言葉もなければ、大元となる具体的な潮流もない。もちろん隠秘学の表現は在来行われていたので、それらを連想させたであろうには違いないが、ではその隠秘学とは何なのか。隠秘学に数えられる諸々の科学の間には隠されていること以外に共通するどのような特徴があるのか、それ以前に隠秘学の範疇に含まれる科学とは具体的には何と何であるのかさえ、いったい誰に確定できるだろうか。一見どれも同じ怪しげなもの、不可思議の説を言う語のようでいて、オカルティズムの氏素性と得体の知れなさは群を抜いている。

そのオカルティズムの起こりとして、ふつつ行われているのは次のとおり、

「朝野を風靡した著作『高等魔術の教理と祭儀』（1856）において、エリファス・レヴィは隠秘学を《オカルティズム》へと体系化した⁶。」

だが実際にエリファス・レヴィの作品を読んでもみればみるほど、この縁起説は正確ではないように思われてくる。このようなオカルティズムの起源にまつわる迷信を糾明し、もって向後の研究のための礎石を新たに置き直すことこそ、本論の目的とするところである。

⁵ Eliphas Lévi, *Secrets de la magie*, Robert Laffont, 2000, p. 392.

⁶ Jean-Pierre Laurant, « Les ésotériques du XIX^e siècle attendent le retour des dieux », in Philippe Barthelet (sous la dir. de), *Joseph de Maistre*, Lausanne, L'Age d'Homme, 2005, p. 547.

エリファス・レヴィのレヴィは苗字ではない

本題へと入る前に、エリファス・レヴィの名をめぐって往々見られる誤りを正しておきたい。「ご存じのとおり、偽名のうしろにちゃんとしたユダヤ人の名前をひた隠しにしている作家の数は枚挙にいとまがない。しかしこのアルフォンス・ルイ・コンスタンは、これとは逆の道をたどって、自分の空想たくましいペてんをエリファス・レヴィというヘブライ語風の偽名で『大カバラ主義者』として売りこむことに、けっして成功しなかったわけではない作家の、唯一とはいわないまでも、たぐいまれなケースであった⁷。」アルフォンス・ルイ・コンスタン（1810-1875）はエリファス・レヴィの筆名で六冊の本を刊行した⁸。この筆名の由来はどんなであったろうか。Eliphas Lévi は Alphonse Louis のアナグラムであるという人もあるが、綴りを見比べてのとおりそれは勘違いであろう。さらにはまたローマ字をヘブライ字に置き換えただけの翻字でもない。エリファス・レヴィがアルフォンス・ルイのヘブライ語訳のつもりであったのは、『高等魔術の教理と祭儀』を紐解いてみさえすれば分かることで、教理篇第十三章に「本書の作者エリファス・レヴィ・ザヘドは招霊した、そして見た」とあり、そこに注して「このヘブライ名を仏訳すればアルフォンス・ルイ・コンスタンとなる⁹」とあるのである。

よってコンスタン＝ザヘドが姓に当たるわけである。これは特段確証のない推測に過ぎないのであるが、この苗字はユダヤ教ではなくイスラム起源なのではないかと思われる。と言うのは、バルテルミー・デルブロ・ド・モランヴィルの『東洋全書』は ZAHED を立項し、「この語は元来、出家遁世して戒律上許された快楽をさえこれを断つ人を意味し、修行三昧の生涯を送つ

⁷ ゲルシヨム・ショーレム『ベルリンからエルサレムへ』岡部仁訳、法政大学出版局、1991年、148-149頁。

⁸ 少なくない参考図書にエリファス・レヴィの主著として *Œuvres complètes de philosophie occulte* なる書名が挙がっていて、文学作品の注釈などでも無批判に引き写されているが、こんな本は存在しない。このような出鱈目が横行するようになった事の起りは、スタニスラス・ド・ガイタがエリファス・レヴィ作品六巻を二揃い、それぞれ赤と青のモロッコ革で装丁させたのに全集と銘打っていたのを（René Philipon, *Stanislas de Guaita et sa bibliothèque occulte*, Dorbon, 1899, pp. 63, 78. しかし、この「全集」には小説『ムードンの妖術師』が含まれていない）、それがいつしか正式な書名でもあるかのように誤解されたものらしい。

⁹ Eliphas Lévi, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 115. ここに言う「招霊」は余りにも有名なテュアナのアポロニオスのそれなのであるが、その顛末は「ヨブ記」第四章にあるエリファスの夜の幻を思わせないではない（Cf. Eliphas Lévi, *La Science des esprits*, Germer Baillière, 1865, pp. 174-179.）。エリファスをヘブライ字で綴ればサメフで終わるのであるから、ザインで終わるエリファズとは完全には一致しないが、全くの無関係とも思われない。

た多くのイスラム博士に叙された法号ともなった¹⁰」と解説しているからである。果たしてこの記載が実際の典拠なのかどうかは断言するべくもないが、ともかくもコンスタン＝ザヘドは強いて日本語に直せば持律持戒の僧くらの意味で理解されていたのであろう。

ところが著作の著者名や書簡の署名ではザヘドは省かれて、エリファス・レヴィとあるばかりである。とすれば本姓コンスタンのヘブライ語訳はいかにもザヘドではあるが、筆名はエリファス・レヴィであり、レヴィはその苗字部分に当たると考えるべきなのであろうか。レヴィはもちろん同名のヤコブの子を始祖とする祭司一族の名に淵源する姓で、プリモ・レーヴィやシルヴァン・レヴィで有名であるし、さらにはまたその仏訳であるとされているルイというフランス人の姓もないではない（例えばエミール・ルイ）。しかし今度は『大密開鍵』を読み直してみさえすれば、そうではないことが分かるのである。この作品には、1857年7月15日から25日にかけて『エスタフエット』誌に連載された戯作調の「パリの幽霊」が再録されているのであるが¹¹、作中エリファス・レヴィは自分自身のことを三人称で物語っている。そこにA夫人という人物と、手相学の再興者として後世に名を残した高弟のアドルフ・デバロルが登場するのであるが、「A夫人もデバロルもエリファスも正体不明の青年司祭のことを耳にしない間に丸一年が過ぎた¹²」とあるのである。もしエリファス・レヴィのレヴィを苗字として認識していたのならば、ここはA夫人もデバロルもレヴィもでなければならぬはずである。さりとしてハンガリー人の名前のように、エリファス・レヴィのエリファスの方が苗字であると考えれば、これによってこれを見るにエリファス・レヴィは姓名ではなく一まとまりの名前なのであって、繰り返しを避けるために略すのであれば、レヴィではなくエリファスと呼ばなければならないことになる。

ジャン・バティスト・リシャール『フランス語拡充 新語辞典』（1842）

そのエリファスがオカルティズムの語を作ったわけではない。フランス語の単語としての *occultisme* の初出は、1842年刊ジャン・バティスト・リシャール『フランス語拡充 新語辞典』にさかのぼる。当該辞典 *occultisme* の項

¹⁰ Barthélemy d'Herbelot, *Bibliothèque orientale*, Compagnie des Libraires, 1697, p. 921.

¹¹ Paul Chacornac, *Eliphas Lévi*, Chacornac Frères, 1926, p. 175.

¹² Eliphas Lévi, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 785.

に« système occulte, d'occultité¹³ »とあり、さらにその上の occultité の項には« état, qualité de ce qui est occulte, caché¹⁴ »とある。1845 年に出た第二版でも語釈に異同はないが、occultité の例文として« l'occultité de ses desseins, de ses œuvres¹⁵ »と追記されている。オカルティズムが後年持つに至った語義にしたがって、これをも「神の思し召し、神の御業の occultité」などと理解したくなるが、そのすぐ下の項 occultisable に挙げられた例文「公明正大なる本来の政府にとって、隠蔽可能な (occultisable) ものは存在しない¹⁶」より推して、世俗的に「その意向、その事業の occultité」と考えるべきであろう。「秘し隠されたものの状態や性質」である occultité をここで深秘と訳するならば、オカルティズムとは「隠秘、深秘なる体系」ということになるだろう。いずれにせよ、例文に事寄せて触れたように、ここで隠すの隠さないのと取り沙汰されているのはあくまで俗事であって、神秘はまったく問題となっていないらしい。『フランス語拡充』の二つの版の合間にこの人が著した冊子本、その名も『真正立憲政府と民権について』には、「市民の方に社会的政治的独立を目がける必然性があり、対する王権の側、貴族制的権制運動にあっては、この全市民の独立を掣肘しようとする […] 目的が、陰に陽に (occulte ou avouée) そうした意図がある¹⁷」とあるから、ジャン・バティスト・リシャールにとって、オカルトとはほとんど inavoué の同義語であり、隠されているのは単に政治的な目論見に過ぎなかったと考えられる。

他方断定しかねるのは、オカルティズムがこの人の手になる造語であるのか、あるいはこの人によって初めて記録に残された新語なのかである。『フランス語拡充』初版への序文には「世に言うフランス語の貧困を補うべく敢然私が読者に呈上するのは、あらゆる現代作家、数多の名演説家、そしてあらゆる一流記者から採録した言葉の集成である¹⁸」とあって、であれば 1840 年前後に出た著作、演説、記事のどこかに初出を求めなければならない。しかるに第二版の序文になると、「いかにして言語を拡充するべきか。言葉を創造し、かつまた既存の言葉を取り立てて、必要であるにもかかわらず決し

¹³ J.-B. Richard, *Enrichissement de la langue française, dictionnaire de mots nouveaux*, 1^{re} éd., Pilout, 1842, p. 332.

¹⁴ *Loc. cit.*

¹⁵ Idem, *Enrichissement de la langue française, dictionnaire de mots nouveaux*, 2^e éd., Léautéy, 1845, p. 441.

¹⁶ *Loc. cit.*

¹⁷ Idem, *Du véritable gouvernement constitutionnel et du droit des peuples*, Pilout, 1844, p. 10.

¹⁸ Idem, *Enrichissement de la langue française, dictionnaire de mots nouveaux*, 1^{re} éd., *op. cit.*, p. ij.

てこれまで与えられてこなかった意味の全て、語義の全てを与えてやることだ¹⁹」と、オカルティズムが手製の新造語である可能性も出てくる。ちなみにアルセヌ・ダルメストテールは、『フランス語拡充』所収の新語のほぼ全てがジャン・バティスト・リシャールの創作になるものとしている²⁰。

いずれにせよ「隠秘、深秘なる体系」を意味するオカルティズムなる語が、1840年頃に生まれた新語であることは確かである²¹。接尾辞の-ismeは「体系」の義である。ところでエリファス・レヴィの文章に「オカルティズムの体系²²」という表現が見えるのであるが、これほどのスタイリストにして、こうも自明のトートロジーを看過したなどということがあり得るのだろうか。あるいは語の成り立ちは速やかに閑却されて、何の考えもなしに用いられていたのだろうか。むしろエリファス・レヴィの言うオカルティズムのイズムは「体系」以外の意味に理解されなければならないのではないだろうか。しかしオカルティズムにはさらに触れておくべき前史があるのである。

ラゴン『隠秘メーソンリー 附ヘルメスのイニシエーション』(1853)

ジャン・マリー・ラゴン・ド・ベティニーは、十九世紀フランス・フリーメーソン史を語る上では避けて通れない浩瀚な著作群を残した作者であるが、今日となっては好古的歴史的な興味の対象としかなっていない。肝心の『隠秘メーソンリー』は、隠秘学の学習をフリーメーソンのイニシエーション過程に統合することを目指したなかなか野心的な作品である。オカルティズムという語は、ここでは明らかに神聖神秘に関わる意味合いでもって、三度にわたって用いられている。もしもオカルティズムに元年があり得るのならば、それは1856年ではなくて1853年ということになるだろう²³。以下、この語の用例を数え上げ、そのそれぞれに参照のための番号を振ることにする。

¹⁹ Idem, *Enrichissement de la langue française, dictionnaire de mots nouveaux*, 2^e éd., *op. cit.*, p. I.

²⁰ Arsène Darmesteter, *De la création actuelle de mots nouveaux dans la langue française*, F. Vieweg, 1877, pp. 26-28.

²¹ 英語 *occultism* を世間に広めるのに多大なる功のあったシネットの『隠秘世界』には、文脈からして明らかにオカルティズムの同義語として«*occult system*»という語句が見られる (A. P. Sinnett, *The Occult World*, London, Trübner, 1884, p. 4.)。

²² Eliphas Lévi, *Le Livre des sages*, Bibliothèque Chacornac, 1912, p. 32.

²³ ただしこの本は「フリーメーソンのみを対象とした秘密出版」(René Philipon, *Stanislas de Guaita et sa bibliothèque occulte*, *op. cit.*, p. 247.) になるものであったらしいから、広く世間へのインパクトの点では『高等魔術』に劣ったはずである。

1 「オカルティズムの光明によって照らされるのでなければ、人間は自由意志を円満に享受し得ない。自己を矯めるには自己を知らねばならない。しかるに世人は、あるいは自己を知らず、あるいは自己を知ること甚だ少ない²⁴。」

結局のところ「汝自身を知れ」の一言に要約されるのであろうオカルティズムは、ラゴンにとっては隠秘学の同義語のようなものであったらしい。何故ならば、「隠秘学は人間に、その本性の神秘を、その構造の秘密を、その完成と幸福へと到達する手段を、そして最後にその運命の裁定を知らしめる。隠秘学研究はかつてエジプトの高等イニシエーションの修めるところであった。隠秘学研究が今しも現代メソンの修めるところとなるべき頃おいである²⁵。」その隠秘学の鍵となるのがカバラである²⁶。「不可視世界を支配する玄妙なる法則は太古来人類の知るところであって、後にカバラあるいは聖なる伝統と名付けられる科学を生み出した。この科学は時代と宗教形式を超越していて、その原理と応用は、インド人であれアラブ人であれヘブライ人であれ一切の東洋人と、カトリック教徒であれ正教徒であれプロテスタント教徒であれ一切のヨーロッパ人とが等しく認めるところである²⁷。」ラゴンの狙いは、大元となる徒弟・職人・親方の象徴位階の上に、こうした人類普遍の聖なる伝統の研究を主眼とする哲学位階と称するものをあつらえて、隠秘学をメソン教学に取りこむことにあった。それを究めた「至人は、あらゆる時代の遺物の寓意に、あらゆる国の祭司の象徴的著作に、秘密結社の儀式に、象徴と哲学と二体系の調和の真理なることを認めるであろう。そこに至人は、大にして尤かつ真なる全体に発して、その全体にあつて初めて現実に整合的となるであろう原理の、一貫した連続と不変の致一を見るであろう²⁸。」時の古近、洋の東西を問わず遍く宗教伝統の外的形式の内に、正しく隠秘なる原理とそこから派生する科学を認めて、これを修めるとき、それまではただ単に象徴的であるに留まっていたイニシエーションが現実化して、自己の知識を備えた愛智者が立ち現れる。

かくして真に自由なメソンとなるためには、カバラを鍵とする隠秘学に習熟しなければならない。そして隠秘学中の女王、無上の隠秘学は、何と言

²⁴ Jean-Marie Ragon, *De la maçonnerie occulte et de l'initiation hermétique*, Maison de Vie Editeur, 2009, p. 74.

²⁵ *Ibid.*, p. 9.

²⁶ *Ibid.*, p. 80.

²⁷ *Ibid.*, p. 79.

²⁸ *Ibid.*, pp. 13-14. ここで言う哲学は、ヘルメス哲学や哲学者の石の哲学で、ヘルメス主義なかんずく錬金術を指すのであろう。

っても魔術である。「魔法は科学の中の科学、あるいはむしろ百学の、ないしは人知の全体である。なればこそ古代マゴスは叡智を極めた哲学者であった。と言うわけは、魔法道士は主要な科学に精通していなければならないのであるから²⁹。」以下、魔術師の学習すべき六つの学問が枚挙されるのであるが、その第一に挙げられているのが、カバラとも重なる部分のあるらしい、広い意味での文字の科学である。

2 「一、前提となる科学は古代言語の知識であり、オカルティズムにおいて用いられるカバラ的記号、数字、アルファベット、呪符その他の神聖文字の知識である³⁰。」

魔術は人間についての科学であるが³¹、人間を知るためにはまず神的原理へと遡らなければならない。原理とその権能を究明し、図形や文字といった象徴を介して原理へとアクセスするための科学がカバラである³²。

言ってみれば、天に関わる隠秘学がカバラ、人に関わる隠秘学が魔術である。残る地、すなわち自然に関わるのがヘルメス学であり、これについては『隠秘メソソニー』に附された『ヘルメスのイニシエーション』でさらに取り上げられているが、その末尾、オカルティズムの語が三度目に現れる。

3 「とにかくオカルティズムを疑う今の世に、フリーエは天体とその影響の研究をなおざりには断じてしなかった。古代科学の秘義秘密を再度穿つことを恐れなかった不世出のこの天才は、普遍的調和と太一の法則の、原因的機巧の崇高なるこの結節点の発見によってもの見事に報いられた。そうして自然の神秘の理解を究めることにかけて、先人たちを、ライブニッツをもさえ凌ぐを得たのであった。錬金術師の輩に倣ったフリーエは、科学のもたらす結果を公にしながら、その結果へと導く方法については知らしめることをしなかった³³。」

前節に述べたようにオカルティズムは当時誕生して十年程度にしかならない新語であった。しかるにここでラゴンがオカルティズムによって言わんとしている対象は、明らかにその語よりも長い歴史を有している何かである。現代が「とにかくオカルティズムを疑う今の世」であるからには、以前にはオカルティズムを疑わない時代があったのでなければならない。占星術や錬金術

²⁹ *Ibid.*, p. 82.

³⁰ *Loc. cit.*

³¹ *Ibid.*, p. 81.

³² *Ibid.*, p. 80.

³³ *Ibid.*, p. 168.

を含む古代科学であるオカルティズムは、ここでもまた隠秘学の総称くらいの意味で用いられているらしい。しかし最後の一文は、このオカルティズムのエゾテリックな性格を強調している。理解の程度に差はあれ万人に開かれたエグゾテリックな世俗科学とは逆に、一定の資格を有する者のみが研究すべきオカルティズムは隠秘学、隠された科学であり隠す科学である。

ラゴンのいわゆるオカルティズムは隠秘学の体系ではなく総称であり、魔術やカバラ、錬金術や占星術のような個々の隠秘学の総合と言うよりもそれらの集合であると考えられる。用例1より推すにオカルティズムが人間についての理論的知識である隠秘学に対応することは確かであるが、同時にその他の何か、例えば知識を現実化する手段としての作業的儀式をも前提としており、結果として隠秘学以上の何かであるという意図が、ラゴンにあったのかは疑問である。イニシエーションへの言及はそうした可能性を示唆しているようではあるものの、断定する材料もない。他方で、用例2にあるように、オカルティズムは一読達意の平明な言語によってではなく、理解のためには予備知識を要する象徴によって表現されており、また用例3で先行者フーリエにかこつけて述べられたように、その実践的技法については秘匿されるべきものである。隠秘学という一般に用いられてきた語の代わりにオカルティズムという目新しい言葉を導入することで、ラゴンはそのオカルト性を、秘し隠されている性質を強調しようとしているかのごとくである。この深秘性に置かれた力点を考慮に入れた上で、さしあたりラゴンにおけるオカルティズムのイズムは体系の義ではなく集合の義であると考えられるべきであろう。オカルティズムはここでは個々の隠秘学の集合であるが、あくまで総和であるに留まるので、そうした科学との関係において総合的超越的な性格を持つものでもないし、また古来の隠秘学研究を何らかの仕方革新するような画期的なイズムとして構想されたものでもなかった。

オカルティズムが隠秘学のほとんど同義語であるという認識は、そのラゴンに端を発することなどはとうに忘れ去られはするものの、ある程度の伝播を闊いたらしい。ベル・エポックから两次大戦間期にかけて活躍した有力なオカルティスト、ピエール・ヴァンサン・ピオブは『オカルティズムの進化と今日の科学』（1911）で、「新語」オカルティズムに関して述べている、「純正とは言いかねる姿形をしたこの言葉は、巷間に流布する隠秘学という表現の術学的略称としてパピュス（アンコース博士）によって造語された³⁴。」

³⁴ P. V. Piobb, *L'Evolution de l'occultisme et la science d'aujourd'hui*, Rayol Canadel, Editions Alliance Magique, 2017, p. 13.

加えて上の文章は、オカルティズム運動もたけなわの時期のオカルティストにして、エリファス・レヴィをオカルティズムの鼻祖であるなどとはてんで考えていなかったことを証明している。

畏るべき後生はともかくとして、ラゴンに見たオカルティズムにおける魔術やカバラの重要性、通時的かつ普遍的な伝統への帰依、そして「天才」的の先人への準拠は、エリファス・レヴィの場合においてもそのまま認められる特徴であるだろう。ところで『隠秘メーソンリー』、魔法についてのくだりに次のような記述がある、「とある博学の魔法道士が目下執筆中の深甚なる労作では、魔法が内包する様々な科学が枚挙の上で論究せられている³⁵」という。この魔法道士こそ誰であろうエリファス・レヴィであり、当の著作こそ他でもない『高等魔術の教理と祭儀』のことなのである。

エリファス・レヴィ『高等魔術の教理と祭儀』初版（1854-1856）

最初に書誌的な事実を確認しておく必要がある。『高等魔術の教理と祭儀』の初版は1854年から1856年にかけてギローデ印刷から分冊の形で徐々に刊行されていて、1856年初旬、全篇の刷了後にジェルメ・バイイェール社に販売委託された³⁶。次いで1861年に同じ出版社から第二版が上梓される。後年ジェルメ・バイイェールがフェリックス・アルカンに引き継がれて以降の版は、この第二版に基づいている。版を改めるに際しては大規模な増補が行われており、さしあたり重要な点に関して言えば、「魔術に関する私たちの著書の宗教的哲学的道徳的傾向について」と題された序論、祭儀篇の章題、そして祭儀篇への補遺、なかんずくテュアナのアポニオスの作になるという『ニュクテメロン』の翻訳が新たに加えられた。よって初版と第二版との相違には留意しておかなければならない。そこで先に初版の方を見ると、意外なことにはオカルティズムの語はわずか三遍しか用いられていないのである。以下に順次該当箇所用例を検討していくこととする。

まずは祭儀篇第五章に言う、

1 「およそ魔術の秘儀、およそグノーシスの象徴、およそオカルティズムの図像、およそ預言のカバラの秘鑰はペンタグラムの印に要約されている³⁷」

³⁵ Jean-Marie Ragon, *op. cit.*, p. 86.

³⁶ Paul Chacornac, *Eliphas Lévi (1810-1875)*, *op. cit.*, pp. 141, 168.

³⁷ Eliphas Lévi, *Secrets de la magie*, *op. cit.*, p. 201 ; Eliphas Lévi, *Dogme et rituel de la haute*

「およそオカルティズムの図像」という表現は、ラゴンの「オカルティズムにおいて用いられるカバラ的記号」に対応しているかのごとくであるが、一方でここに「およそ預言のカバラの秘鑰」と言うからには、「カバラ的記号」はこの場合にはオカルティズムではなく、エゼキエルやヨハネによるそれに代表されるのであろう預言の範疇に入るのであろう。それはともかくとして、今からして既に断言できるのは、これらが特段意味のない単なるレトリックであるということはない。何故ならば、ペンタグラムが問題になっている以上、様式美の見地からすれば必ずや五つの意義がこめられていてしかるべきところが、魔術、グノーシス、オカルティズム、預言の四つしか挙がっておらず、しかも付け加えるべき表現、例えばおよそヘルメス主義の寓意くらいのことはたやすく思い付くだろうはずなわけで、そこには何らかの意図があるはずなのである。あるいは、ペンタグラムの五芒はしばしば五元素に比定されるから、四大に契合するのであろう魔術とグノーシスとオカルティズムと預言だけに言及して、感覚不可能な第五元素エーテルについては触れないでいたという可能性もないではない。しかしながらその場合、上の四つがそれぞれ地水火風のいずれに対応するのか著明ではないのだが、一つ言えるのは、であるとすればそのオカルティズムは断じて隠秘学を体系化したものではない。何となれば、もしもオカルティズムが隠秘学の体系であるならば、それが呼応するべきは四大の上位原理である第五元素以外にはあり得ないだろうからである。

続いて、「妖術師のサバト」と題された祭儀篇第十五章では、同書の口絵であるサバトの山羊、山羊の頭に両性具有の人の体が付いた異形の図の絵解きが行われるが、そこには、

2 「山羊は両の手でオカルティズムの印を結んでいる³⁸」

とある。実際の絵を見れば³⁹、山羊は親指と人差し指と中指の三本を立て、薬指と小指を曲げている。ところで、それとは別に『高等魔術』初版の各巻末には挿絵解説が添えてあって、第二版では第一巻の巻頭に二巻分まとめて掲載されているのであるが、何故か現在の作品集『魔術秘訣』からは抜け落

magie, t. II, 1^{re} éd., Germer Baillière, 1856, p. 61.

³⁸ Idem, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 247 ; Idem, *Dogme et rituel de la haute magie*, t. II, 1^{re} éd., op. cit., p. 161.

³⁹ Idem, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 158 ; Idem, *Dogme et rituel de la haute magie*, t. II, 1^{re} éd., op. cit., frontispice.

ちてしまっている。そのサバトの山羊の解説を見るに、山羊の「手は上に下にエゾテリスムの印を結んでいる⁴⁰」とある。エリファス・レヴィにとって、オカルティズムとエゾテリスムとは同義語だったのである。

『高等魔術』のサバトの山羊は上げた右手と下げた左手の両方に件の手印を結んでいるのであるが、同じ印契を片手にのみ作っているのはタロットの女教皇である。『魔術史』に言う、女教皇は「一方の手を書物の上に置き、もう一方の手は聖職者のエゾテリスムの印を作っている、すなわち三本の指のみを開き、残りは秘密の印に曲げたままにしている⁴¹。」ここに言う女教皇の図は、プロテスタント作者の筆になる女教皇ヨハンナの伝に同女の古図として収められているのだという⁴²。これはジュネーヴ大学の総長を務めたフリードリヒ・シュパンハイムの『女教皇ヨハンナ伝』のことであろうから、その挿絵の一つを見るに⁴³、左手が本を広げて見せている一方で、右手は確かにエリファスの言う通りの形を作っている。開かれた書物が公開された教え、知的な有資格者のみを対象とするエゾテリスムの対義語として、その知性の程度の如何を問わず万人によって知られるべき顕教を指すエグゾテリスムの象徴であるのは見やすい道理である⁴⁴。ともあれオカルティズムとエゾテリスムの同義語としてさらに秘密 (mystère) の語が出て来たわけである。

『高等魔術』、今度は教理篇に戻ると、タロットの「第二図、俗に言う女教皇は数に基づく教理の一元性を表わしているので、それは擬人化されたカバラあるいはグノーシスである⁴⁵。」タロットの大アルカナをヘブライ文字に重ね合わせるエリファス・レヴィの解釈では、数 2、女教皇はヘブライ文字ヴェートに照応するが、『大密開鍵』によればこの字は「数 2 の象徴、現実化するロゴスの表現、グノーシスとオカルティズムの特別な文字⁴⁶」であ

⁴⁰ Idem, *Dogme et rituel de la haute magie*, t. II, 1^{re} éd., op. cit., p. 323 ; Idem, *Dogme et rituel de la haute magie*, t. I, 2^e éd., Germer Baillière, 1861, p. VI.

⁴¹ Idem, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 303. 教理篇の挿絵の一番目も「聖職者のエゾテリスム」と題されている。女教皇と同様、大アルカナの教皇もまた「エゾテリスムの印」を結んでいるという (Loc. cit.) 。

⁴² *Ibid.*, p. 302.

⁴³ Frédéric de Spanheim, *Histoire de la papesse Jeanne*, t. I, La Haye, Henri Scheurleer, 1720, p. 194&197.

⁴⁴ 有名などころでは、ノートルダム・ド・パリ大門トリュモーンに鎮座する錬金術を寓意する女性は、右手に重ねてエグゾテリスムとエゾテリスムとの象徴である開かれた書物と閉じられた書物を載せている (Fulcanelli, *Le Mystère des cathédrales*, Hades, 2017, p. 85.) 。

⁴⁵ Eliphas Lévi, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 103.

⁴⁶ *Ibid.*, p. 371.

るとされる。女教皇の像が擬人化するカバラあるいはグノーシスが結ぶのが、オカルティズムの、エゾテリスムの、秘密の印である。オカルティズムは明らかに秘密教の意味で用いられている。そして「グノーシスとオカルティズムの特別な文字」という表現より推すに、オカルティズムは秘密裏の教えではなくむしろ秘密裏に教える行為を指しているものと考えられる。もしもオカルティズムが秘密の教えの内容であるとすれば、グノーシスの象徴である女教皇がオカルティズムの印を結んでいる以上、その内容はグノーシスでなければならないわけであるから、「グノーシスとオカルティズムの」では同語反復になってしまう。ヘブライ字ヴェートはグノーシスとオカルティズム、隠された教えと隠す教えを象徴する文字であると解くのが自然であろう。

祭儀篇第十九章、ラゴンと同じく錬金術のメーソンリーへの統合を目指したチュディ男爵の著『燃える星』第二巻中の「知られざる究竟の哲学者のアデプトあるいは徒弟位階のためのカテキズムあるいは教書⁴⁷⁾」に触れて言うところには、

3 「英明のカバリスト諸兄にバラケルススの比類ない論考に成り代わり得るものとしてお知らせさせていただくこのカテキズム、大業の根本原理を余さず取めること存分かつ明快、これを修してなお絶対的真理に至らないためには、オカルティズムへの特別な造詣を絶対的に欠いているのでなければならない⁴⁸⁾。」

ここでオカルティズムが意味しているのは、ラゴンの用例 2 における意味に近く、生きている金とか哲学者の真の火とかいった錬金術書に特有の言語であり、エリファス自身のパラフレーズによるならば、「形式は晦渋でありながら内容は平明な言葉⁴⁹⁾」である。字義通りの意味を追っているだけでは訳の分からない夢物語としか思われぬ錬金術書でも、それぞれの象徴の意味する内容を知る人ならば、より正確に言えばそれを知る人だけが読み解けるように、そうした人に読まれるように書かれているのである。したがって、錬金術の理解を俗人には事実上不可能にしている象徴的イメージはエグゾテリズムであり、その唯一真の想定読者であるイニシエだけが知る意味、「オカルティズムへの特別な造詣」がエゾテリズムに当たる。やはりオカルティズムはエゾテリスムの同義語であると言えるであろう。

⁴⁷⁾ Louis Théodore Tschoudy, *L'Etoile flamboyante*, t. II, Gutenberg Reprints, 2006, pp. 179-247.

⁴⁸⁾ Idem, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 282. ; Idem, *Dogme et rituel de la haute magie*, t. II, 1^{re} éd., op. cit., pp. 296-297.

⁴⁹⁾ Idem, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 283.

『高等魔術の教理と祭儀』の初版に見られるオカルティズムの出所は以上三つである。用例2と3から、エリファスにとってオカルティズムとはエゾテリスムと同じく秘密の教え、それもその教えの具体的な何らかの内容を指すというよりもむしろ、縁なき衆生を排除して上座部の賢哲にのみ知られるべく隠す教えであり、秘密にするという行為に力点が置かれている。これによって見るにエリファスのオカルティズムは、隠秘学のオカルト性を強調するラゴンのオカルティズムとおおよそ同一の対象を表わすものと考えられる。

逆に用例1において、魔術、グノーシス、預言と並べて挙げられたオカルティズムの語の意味は依然として定かではないが、用例2との関連で見たようにグノーシスとオカルティズムが秘密教、隠された教えと隠す教えであるとするならば、その秘密教の知識が人間を介して自然に対して行使されれば魔術となり、神と人間とを結べば預言となると推測することはできるだろう。あるいは、別の著作にはあるが、「グノーシスあるいはカバラの教理⁵⁰」、「私たちが魔術と呼ぶこの自然カバラ⁵¹」ともあるから、カバラの実践的部分が魔術、理論的部分がグノーシスであるとも考えられる。そして、「預言者のカバラ⁵²」と言うからには、預言者が靈感によって神から得た啓示の表現がカバラとなって結実するのであろう。その場合、オカルティズムはこのカバラのエゾテリスムでなければならない。モーセと預言者の「教理は、古代エジプト人のそれと根底においては同一のものであるが、やはりそのエグゾテリスムとそのヴェールを持っていた。聖典は寓意を借りて言う、民に向かって語るとき、モーセは顔にヴェールをかけ、神と語るときにはこれを外した。これこそがヴォルテールをして遺憾なくその諷刺の才を揮わしめた聖書の不条理なるものの原因である。聖書が書かれたのはひとえに伝統を髣髴させるためであり、それも俗人からすれば訳の分からない象徴でもって書かれたのである⁵³。」伝統はカバラの語源的な意味であるから、この伝統、カバラのエグゾテリスムである「俗人からすれば訳の分からない象徴」とは先の「形式は晦渋でありながら内容は平明な言葉」と同じことである。逆にカバリストたちだけが受け継ぐ、神と預言者との間に親しく語られたその内容の伝承がカバラのエゾテリスムである。とすれば捉え方に応じて、あるいは

⁵⁰ *Ibid.*, p. 989.

⁵¹ *Ibid.*, p. 814.

⁵² *Ibid.*, pp. 316, 479.

⁵³ *Ibid.*, p. 46.

魔術あるいはグノーシスはたまたま預言の相を帯びるカバラのエゾテリックな教授方法を指してオカルティズムと称していると言える。

エリファス・レヴィ『高等魔術の教理と祭儀』第二版（1861）

『大密開鍵』の刊行に合わせたのであろう、折から版を重ねた『高等魔術』増補第二版では、新たに三箇所におカルティズムの語が見られる。その内で断然重要なのは開巻劈頭、序論での用例である。先行しておカルティズムの語を用いたラゴンの「天才」フリーエは、エリファスにとってはただの「マニアク⁵⁴」に過ぎない。依拠するべき「天才」は他にあった。

1 「輓近カトリック教最大の天才、ジョゼフ・ド・メーストル伯爵はこの大事件を予言していた。曰く、《ニュートンが私たちをピュタゴラスへと回帰させる。科学と信仰との間に存する影影はいつしか両者を和解せしめるのでなければならぬ。今や世に宗教はない、しかしそんな畸形は長くはもたない。十八世紀はなおも続く、しかしそれももう終わる。》信念と希望とをメーストル大人と同じうする私たちは、蒼古たるオカルティズムの伽藍の遺構を敢然発掘した。カルデア人、エジプト人、ヘブライ人の秘密教に教理変容の秘密を尋ねた。すると永遠の真理が私たちに答えた⁵⁵。」

もとよりエリファスの「天才」ジョゼフ・ド・メーストルへの傾倒は昨日今日始まったことではなかったので、つとに社会主義者アルフォンス・コンスタン時代の著作に、「おそらくは現代教会が誇り得る最勝の天才ジョゼフ・ド・メーストルは、科学の光明を信仰の霊明に統一するであろう預言者を待望してさえいて、加えて言うことには《預言者は雄偉の人であろう、この人が間もなく来臨する、ひょっとするともう世にあるのかもしれない！》⁵⁶」とある。カトリック教正統の隠れもない権威にかこつけながらも、我こそはその「預言者」であるという矯激な思いが透けて見えるようである。「世界は宗教を失って苦しんでいる、そして私は我と我が身を危うくして理性と信仰の間に可能な和解を示そうとした⁵⁷」。

⁵⁴ *Ibid.*, p. 525.

⁵⁵ *Ibid.*, pp. 9-10; Eliphas Lévi, *Dogme et rituel de la haute magie*, t. I, 2^e éd., *op. cit.*, pp. 2-3.

⁵⁶ Alphonse Constant, *Le Livre des larmes ou le Christ consolateur*, Paulier, 1845, p. 226.

⁵⁷ Eliphas Lévi, *La Science des esprits*, *op. cit.*, pp. 318-319. もっともそのすぐ後に「各人に各様の務めがある。私たちの先駆者のそれで、建設者のそれではない」(*Ibid.*, p. 324.)とも断っている (Cf. Eliphas Lévi, *Cours de philosophie occulte*, Guy Trédaniel, 1988, p. 177.)。ところで、ここで注意をしておかなければならないのが、エリファ

肝心の引用だが、これは『サンクトペテルブルク夜話』第十一対話の一節のパラフレーズであり⁵⁸、エリファスを突き動かした「信念と希望」とはすなわちメーストルの伝統主義、全ての伝統の超越的一元性への信頼と、そこから結果する一なるオーソドクシーに現代科学が回帰することに対する希求に他ならない。引用された箇所直後にメーストルは言う、科学の進歩によって「証明されるであろうことには、古代の伝統はみな真であり、おしなべて異教は頽廃し所を得なくなった真理の体系でしかないので、言ってみれば廓清の上、しかるべき場所に戻してやりさえすれば、それらの真理は全き光

スには生来逆説や矛盾を弄ぶけれんの癖があったということで、それはブラヴァツキーのような人にまで「真つ当なカバリストの亀鑑と言うにはややもすると強烈に過ぎる揶揄と逆説への偏向がある」(H. P. Blavatsky, *The Theosophical Glossary*, London, The Theosophical Publishing Society, 1892, p. 188.)などと評されてしまうほどである。だから上段のようにメーストルに従う一方で、「今世紀に宗教はないなどと言われているが、それは思い違いであって、何となれば今世紀は大変な苦しみを嘗めているのであるから。さて、もし宗教がなければ苦しみもない、と言うわけはその場合生きてなどいられないであろうから。」(Alphonse Constant, *Le Livre des larmes ou le Christ consolateur*, op. cit., p. 63.)さらには件の「天才」を名指しにしさえして、「《世界には宗教がない》、今世紀初頭にジョゼフ・ド・メーストル伯爵は深い失望をこめて述べた。万事につけ度を過ごしたこの天才は思い違いをした。世界は断然宗教を持たないではないので、何となれば宗教とはなにがしかの教理でもなにがしかの崇拜でもなにがしかの司祭のことでもない、それは人間の内的な感覚なのである。」(Eliphas Lévi, *Fables et symboles*, Germer Baillière, 1862, p. 401.)エリファスの鍾愛する逆説の好個の例がここにも見て取られるわけだが、外見に欺かれてはいけない。明らかに宗教という語の指す意味が違っている。上に引いた箇所存在しないとされている宗教はカトリック教会の同義語である一方、ここに存在しないではないとされているのは大文字の宗教、文字通り人と神とを結ぶ紐帯としての宗教である。ことさらに充足理由律など持ち出すまでもなく、原因を持たない結果はあり得ず、原理を持たないものなどそもそも存在し得ないという当たり前のことが述べられているのに過ぎないのである。

⁵⁸ Joseph de Maistre, *Œuvres*, Robert Laffont, 2007, p. 765. つとにポール・ヴェリヨーも述べているように (Paul Vulliaud, *Joseph de Maistre Franc-Maçonn*, Milan, Archè, 1990, p. 230.)、メーストルの思想を捉えるに当たっては革命の以前と以後とを区別する必要がある。革命以後のメーストルを代表する作品が『教皇論』である一方、革命以前のメーストルを代表するのは遅くに実を結んだ『サンクトペテルブルク夜話』ということになるだろう。エリファスに影響を与えたのはこの『サンクトペテルブルク夜話』の、イリュミニスムに傾倒するフリーメイソンのメーストルの方であって、『教皇論』の方を受け継ぐ同時代人のルイ・ヴィヨなどに対してはいたって冷淡であった。要は「私たちは賢者について話している、私たちは教皇については話していない。」(Eliphas Lévi, *Fables et symboles*, op. cit., p. 374.)ちなみに当時の教皇はピウス九世で、自由主義に対する反動化の過程で反ユダヤ主義へと傾斜していたから、元聖職者であるにもかかわらずユダヤ風の名を名乗り、「私たちの救済は今一度イスラエルより来るであろう」(Eliphas Lévi, *Le Livre des splendeurs*, Chamuel, 1894, p. II.)とカバラを説くエリファスとは馬が合うべくもなかった。

輝でもって輝かないではないのです⁵⁹。」この伝統主義は、既にして若き日のアルフォンス・コンスタンの奉戴するそれであった。「私の説く思想は思惑ではない、二十年にわたる刻苦勉励の末、奉じるに至った信仰であって、その信仰を守るためとあらば生命を投げうつ覚悟である。それは古代のあらゆる賢者の思想であり、ソクラテスの、プラトンの、ピュタゴラスの思想、聖書の寓意にこめられた秘密、福音書の釈義であり使徒の思想である⁶⁰。」異教時代の賢者、さらにはその思想の源泉であるべきエジプトの伝統とユダヤ教、そしてキリスト教と、形を変えつつ世の始めより連綿と行われる永遠の真理としての伝統的教理への信頼が、紛うべくもない仕方で表明されている。それはあたかも唯一の真理が、語りかけるべき人々の歴史的地理的精神的等諸々の偶有的条件に適応して形を異にする衣装をまとうようなものである。外に現れたエグゾテリックな多なる形の内に隠されたエゾテリックな一なる原理の認識こそが「教理変容の秘密」でなければならない。

とは言えイエス・キリストの化生によって存在理由を失い「所を得なくなった」異教が減びて、キリスト教に先行する伝統からそれらがかつて賦活した霊が引き上げて、後には頽廃した真理の形骸だけが残された、そのキリスト教の歴史的画期ということについては、メーストルにとっても、叙階の秘跡を授かる直前に躓いて司祭職を諦めたとはいえ元助祭のエリファスにとっても自明である（「本書の作者は聖職の大家族に属しており、決してそれを忘れたことはない⁶¹」）。キリスト教のみならず古代の伝統もまた真理であると説く二人の念頭には、カトリック教会によるフリーメーソン批判の御題目である宗教的相対主義もなければ、逆に第二バチカン公会議の見ようによってはルーズな適応主義もない。キリスト教は絶対である。しかるに革命によって顕在化し、1905年の政教分離法へと至るカトリック教会の凋落は否定するべくもない。今存在する真理の、少なくとも西洋における最も重要な代表者であるはずの教会の教勢は衰退しつつある。ならば、かつて存在した真理の方へこそ救いを求めるべきだろう。真理は永遠に一つなのであるから、かつてあった真理を尋ねて、今ある真理、イエス・キリストの啓示を踏まえ

⁵⁹ Joseph de Maistre, *Œuvres, op. cit.*, p. 766.

⁶⁰ Alphonse Constant, *Doctrines religieuses et sociales*, Aug. Le Gallois, 1841, p. 42.

⁶¹ Eliphas Lévi, *Le Grand arcane ou l'occultisme dévoilé*, Chamuel, 1898, p. 334. アルフォンス・コンスタンは司祭であったと書く本も少なくないが、しばしば助祭のことを補佐司祭などと言ったりすることもあるだけに間違いやすいのは理解できるものの、これは心ない誤りである。と言うのは、エリファスの母親は息子が司祭職を断念して還俗したのに絶望して自殺を遂げたのであるから。

てもう一度それへ活を入れればよい。現代科学の進歩によって再び見出された古代人の科学と、厳然として法を伝える宗教との調和から未来の真理が結果するであろう。それはあたかも、今ある真理が世にもたらされたとき、イエス・キリストの下生に際して、旧世界が頂いた古代の伝統を、言わばイエス・キリスト以前のキリスト教を代表して三人のマゴス、東方三博士が礼拝に訪れたかのごとくである。そしてここで思い起こすべきことには、「魔術とはマゴスに由来する自然の秘密の伝統科学である⁶²」。

こうした精神でもって「蒼古たるオカルティズムの伽藍の遺構を敢然発掘した」、「カルデア人、エジプト人、ヘブライ人の秘密教に教理変容の秘密を尋ねた」と言うが、この箇所は『高等魔術』の今度は序文の冒頭、おそらくはエリファスの筆になる中で最も有名な一節を予告している。「およそ古教の莊嚴神秘なる寓意のヴェールを越えて、およそイニシエーションの闇と奇怪な試練を越えて、およそ聖典の封印の下、ニネベなりテーベなりの遺構の中、廢神殿の風化した石の上、アッシリアなりエジプトなりのスフィンクスの煤けた顔の上、インドの信者にヴェエダ聖章を絵解きする畸形のあるいは不思議な絵画の中、我らが錬金術の古書の奇想天外な表徴の中、およそ秘密結社の修する参入儀式の中、いずこにても同じ、いずこにても秘し隠された教法の痕跡が認められる⁶³。」インドからアッシリア、さらにはエジプト、ヨーロッパまで、古代から近代まで、時間と空間を越えて認められる秘密教は、フリーメーソン界限を措けば、なるほど教えとして今なお現実に行われているとは言い難い。しかしかつて教法の精神が宿っていた痕跡は、遺跡や書籍に象徴的な形で残されている。伝統はみな真であるというメーストルの先蹤に倣ってエリファスは「オカルティズムの伽藍の遺構」へ向かい、そしてそこに永遠不変の真理を再び見出したのであった。その真理が「いずこにても同じ、いずこにても秘し隠された教法」なのであるから、オカルティズムとは古来遍く行われたエゾテリックな教育方法の義と考えられる。

『高等魔術』の改補に当たって、エリファスは初版にはなかった章題を付した。祭儀篇第十章は題して、

2 「オカルティズムの鍵⁶⁴」

⁶² Idem, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 54.

⁶³ *Ibid.*, p. 35.

⁶⁴ *Ibid.*, p. 222. ; Idem, *Dogme et rituel de la haute magie*, t. II, 2^e éd., op. cit., p. 149.

同じ語句は『大密開鍵』に述べられた占い師エドモンにまつわるエピソードの中でも用いられている。「私たちの友人にしてカバラにおける弟子の一人で、エドモンとは縁もゆかりもなかったのが、ある日占ってもらいに行つて料金を前払いし、御託宣を待っていたところ、エドモンは恐惶席を立つと返金を申し出たのだった。重ねて言うことには、《私に申し上げられることは何もございません。あなたの運命は私にはオカルティズムの鍵でもって閉ざされているのです。私に言える程度のことは、あなたも先刻御承知のことばかりです。》」オカルティズムの鍵とは秘密教の鍵、カバラ以下隠秘学の秘密裏に行われる教育の鍵である。カバラを伝授されたエリファスの弟子ならば知っている、あるいは少なくとも知る資格のあることが、ただ単に直観力に恵まれた俗人であるに過ぎないエドモンには知るべくもない。何故ならば「彼はソロモンのカバラの鍵を持たない⁶⁵」のであるから。逆にこの弟子の方では「ソロモンのカバラの鍵」を持っていることになるが、それを授けたのは師のエリファスである。「時と共に忘れ去られ、失われたと人の言うソロモンの小鍵を再び見つけ出した私たちは、苦もなく蒼古たる伽藍の扉をことごとく開放したところが、その中では絶対的の真理が眠っているかのようだった⁶⁷。」それは正しく、先の「蒼古たるオカルティズムの伽藍の遺構」の扉を開く「オカルティズムの鍵」であった。

『高等魔術』第二版では、補遺として祭儀篇の末尾にテュアナのアポロニオス作とされる魔術儀軌『ニユクテメロン』の翻訳が収録された。この題名を仏訳すれば、

3 「オカルティズムの光⁶⁸」

となるという。ギリシア語の辞書を開いてみるまでもなく、メロンが『デカメロン』や『ヘプタメロン』のメロン、日や昼の意であり、ニユクテがニユクス、夜なのは明らかである。オカルティズムとは夜闇の謂い、闇の中に隠された教法の秘密であって、ニユクテメロンとはその秘密の白日の下での公開を意味していると考えられる。

『高等魔術の教理と祭儀』改訂版に、エリファスは以上三箇所でおカルティズムの語を用いている。前段に検討した旧版に既にある三箇所の用例と合

⁶⁵ Idem, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 654.

⁶⁶ Loc. cit.

⁶⁷ Ibid., p. 682.

⁶⁸ Ibid., p. 321. ; Idem, *Dogme et rituel de la haute magie*, t. II, 2^e éd., op. cit., p. 385.

わせてわずかに六箇所、オカルティズムの祖師とされるエリファス・レヴィ作品においてオカルティズムの語はさして重要な位置を占めていなかったのだ。しかも、これはラゴンの場合にも言えたことであるが、いずれの箇所においてもオカルティズムとは何かという定義や説明は一切ない。先行してこの語を掲載したジャン・バティスト・リシャールの辞典が世間で広く用いられていたとは思えないからには、おそらくは初めてこの語を目にするであろう読者にとって、その意味するところはおのずと明らかであると考えていたのでなければならない。形容詞 *occulte* 「隠れた」に *-isme* が付いた語形よりして、オカルティズムは「隠すこと」、「隠されたもの」、「秘密」程度の意味を持つか、せいぜいが人口に膾炙していた表現である隠秘学を連想させるくらいで、何らかの新体系であったはずがないのである。

結論と展望 新しいオカルティズム史

十九世紀中葉のフランスに誕生したオカルティズムは新語でありながら、当初より千古の伝統を、それもその伝承が秘密裏に行われているという非常に緩い条件で、東から西からかき集めてきた多分に出所不明の古酒を注ぎこまれた新しい皮袋であった。カバラ道士を号するエリファスに言わせれば、カバラとは「醇正なるオカルティズムの伝統⁶⁹」であり、この知恵の美酒に醱酏していたところをノアはその子ハムに見とがめられた。「父の赤裸を世に曝す子の罪科に、オカルティズムの暴露はなぞらえられている⁷⁰。」ヘブライの伝統はヨハネに受け継がれ、「『セーフエル・イエツィラー』、『ゾーハル』、『黙示録』はオカルティズムの傑作である⁷¹。」時代は下って、『神曲』や『薔薇物語』もまた「重要なオカルティズムの現れ⁷²」であった。そしてオカルティズムは「中世の暗黒時代、メーソン組織の秘密の根源の一つであった⁷³。」メーソンリー界限、殊にメイン・ストリームからは逸脱した神殿騎士や薔薇十字の末裔たちを経て伝わった、失われた言葉の再発見を告知したのが「聖都慈悲行騎士」ジョゼフ・ド・メーストルであった。この人は「オカルティズムの大伽藍より発するであろう光による、教理の来る再

⁶⁹ *Idem, Secrets de la magie, op. cit., p. 1.*

⁷⁰ *Ibid., p. 378.*

⁷¹ *Ibid., pp. 379-380.*

⁷² *Ibid., p. 564.*

⁷³ *Ibid., p. 877.*

生を予告していました⁷⁴。」そして件の「蒼古たるオカルティズムの伽藍」を訪れたのが、当のエリファス・レヴィ本人であった。ではその発見者にとって、オカルティズムとは結局のところ何を意味する言葉であったのか。秘密教のような、それ自体漠とした表現ではなく、はっきりと一口に言えないものなのか。その答えを確定することを可能にするくだりがあるのである。

「『セーフエル・ツェニウタ』あるいは『秘密の書』は『ゾーハル』の鍵にして第一書ですが、次のような言葉で始まっています、《オカルティズムの書は普遍大天秤の均衡を述べる書である⁷⁵。》」ここでエリファスは明らかにクノール・フォン・ローゼンロートによる『ゾーハル』のラテン語訳『カバラ開頭』に依っているので、同書の該当箇所を見れば、「*Liber occultationis est ille qui describit librationem bilancis*⁷⁶。」とある。見てのとおり、オカルティズムは、「隠す」*occultare* の名詞形「隠すこと」*occultatio* をフランス語に訳したものであったわけである。その際、わざわざ新語 *occultisme* を用いて、*occultation* を取らなかつたのは、当時にして既にこちらの語は天文学用語として定着していたからであろう。エリファス・レヴィにとってオカルティズムは隠すという行為を指す言葉であったのであり、自己のものである古人のもあれ何らかの体系の名称ではなかつたのである。

1875年、エリファスの死とともに、オカルティズムの語もまた忘れ去られていくはずであった。ところがこのときあたかも大西洋の彼方アメリカで、エリファス作品を読みこんでその思想を自家菜籠中の物としていたブラヴァツキー夫人が神智学協会を立ち上げる。1877年にニューヨークで刊行された『ヴェールを剥がれたイシス』巻頭にはオカルティズムが定義されている、「オカルティスト——隠秘学の諸部門を研究する人。この語はフランスのカバリストたちによって用いられている（エリファス・レヴィ作品を見よ）。オカルティズムは心理的生理的宇宙的物理的靈的現象の全領域を包摂する。隠されたあるいは秘密のを意味する語 *occult* に由来。よって、カバラや占星術、錬金術、玄学の一切切切について用いられる⁷⁷。」ブラヴァツキーの大著以上に広く読まれて、オカルティズムの語を満天下に知らしめたシネットの『隠秘世界』第一章は「オカルティズムとそのアデプトたち」と題されて、

⁷⁴ Eliphas Lévi, *Le Livre des splendeurs*, op. cit., p. 260.

⁷⁵ Eliphas Lévi, *Cours de philosophie occulte*, op. cit., p. 39. 同書 208 頁も参照。

⁷⁶ Christian Knorr von Rosenroth, *Kabbala Denudata*, t. II, Frankfurt, Johann David Zunner, p. 348.

⁷⁷ H. P. Blavatsky, *Isis Unveiled*, vol. I, Pasadena, Theosophical University Press, 1998, p. xxxvii

神智学協会の指導者たちを主としてアストラル界経由で教導する、ヒマラヤ山中なる神仙マハトマたちのことが語られている。オカルティズムは今やすっかり東洋の賢者の教えとなってしまった。この本では特段の区別もなくオカルティズムの同義語として隠秘学の語が用いられているのだが、「ヨーガの学というのが隠秘学のインド名である⁷⁸」とされている。

1878年、アメリカからインドへと本拠を移した神智学協会はマハトマの教えに基づいて体系化されたオカルティズムを唱導、旧大陸を席卷することになる。英語圏におけるアニー・ベザント、ドイツ語圏におけるルドルフ・シュタイナーのような大物を生み出すまでには至らなかったものの、オカルティズムの語の生地フランスもまた例外ではなかった。ではその間、「フランスのカバリストたち」は何をしていたのかと言えば、エリファスのことなどすっかり忘れ果てていた。後年マルチニスム会を率いて、オカルトシーンに神智学協会と覇を競うことになる「科学的オカルティズムの頭首⁷⁹」パピュスことジェラルド・アンコースがエリファスに弟子入りを志願した手紙が残されているが、それが書かれたのは1886年のことである⁸⁰。十年以上前に肝心のエリファスが死んでいたことさえ知らなかったのだ。いわんや何らかの師資相承などあるべくもなかった。

やがて1890年のフランスと言えば、師匠格に当たるサン＝ティーヴ・ダルヴェードルの隠然たる影響の下、ジョゼファン・ペラダン、スタニスラス・ド・ガイタ、フェルディナン・シャルル・バルレ、そしてパピュスを始めとする綺羅星のごときオカルティストたちが雄飛を始めていた時期であるが、その時点にしてなお、作家ジュール・レルミナは神智学協会について述べている、「オカルティズムと言うのもこの新学統の名称なのであるが、僧侶たちのために頹廢するところとなりはしたものの、一部の人たちによって原始の醇乎たる教法が伝えられた原始仏教へと回帰するべく努めている⁸¹。」エリファスの流れを汲む「フランスのカバリスト」を代表して、パピュスは同

⁷⁸ A. P. Sinnett, *The Occult World*, op. cit., 1884, p. 19.

⁷⁹ August Strindberg, *Inferno*, Gallimard, 2001, p. 121.

⁸⁰ Fac-similé dans *L'Initiation*, avril-mai-juin 1956, pp. 89-90.

⁸¹ Jules Lermina, *Magie pratique*, Ernest Kolb, 1890, p. 128. フランス・オカルティズム全盛期であったベル・エボックの末になってなお、ある神智学徒は自分たちこそ「究極にして唯一真正のオカルティスト」(Edouard de Morsier, «L'Evolution de l'occultisme», *Bibliothèque universelle et revue suisse*, n° 207, 1913, p. 590.)であると言い、暗にパピュス一派のそれは紛い物であると主張している。神智学協会が自派の教えを別にオカルティズムと称したのは、théo「神」の語に生理的に反発してしまう社会主義系の人たちを取りこもうとする意図があつたのこととも考えられる。

書の書評の中で認めている、「神智学協会の活動はカバリストたちをしてその教育方法を改革させしめた。ひとえに少数者を、質を目がける代わりに、爾後カバリストたちは大衆を、量を目がけるようになった。これこそが、数年来フランスにおいてかくまでの進歩を遂げたオカルティズムのこの伸張の起源であった⁸²。」オカルティズムは神智学協会によってもたらされた外来の教えなのではなく、従来少数の知的エリートを対象とするエジプティズムとして行われていたのが、国外からのこの刺戟を受けて広く世間に知られるところとなったに過ぎないのだという。その翌年、永遠の真理の唱道者には似つかわしくないショーヴィニズム的衝動に突き動かされているらしいパピュスは、アングロサクソン渡りの外教を撃退するべく、少なくとも量にかけては申し分のないスピリティズムに秋波を送っている、「スピリティズムの理論はオカルティズムのそれと同じである。[…] この二大学統が説いているのは、畢竟同一の教法である⁸³。」そのスピリティズムを論駁するべく祖師エリファスは『霊の科学』を書いたという事実を思い合せるとき、ここに政治的な方便のみならず最低限度の知的な誠実さを認めるのであれば、少なくとも 1891 年のパピュスにはオカルティズムとは何かに関しての定見の持ち合わせがまるでなかったことは瞭然としている。そして十余年の後、H. B. of L. のフランス代表にして、スタニスラス・ド・ガイタの跡を襲って薔薇十字カバラ団を率いるフェルディナン・シャルル・バルレは言う、「オカルティズムはその全体において自己をわきまえず、自己を認めず、自己の何たるかをさえ知らないでいる⁸⁴。」

十八世紀末イリュミニズムから出たジョゼフ・ド・メーストルに啓発されて、エリファス・レヴィは著作や遺稿、書簡の中でオカルティズムの語を確かに数十回にわたって用いた。しかしだからと言って、この語を用いたのはエリファスが最初であったわけでもなければ、エリファスにとってこの語が何か新しい主義や体系を意味していたわけでもなかった。エリファスの没後、フランスではほとんど顧みる者もなかったオカルティズムは、ブラヴァツキーの神智学の別称としてその教学体系に取りこまれ、そうしたものとして逆輸入された。なればこそ本論でも一貫してオキュルティズムではなくオカル

⁸² Papus, « L'Occultisme en 1890 », *L'Initiation*, mars 1890, p. 200.

⁸³ Papus, *Traité méthodique de sciences occultes*, Georges Carré, 1891, pp. 359-360. 全く同じ文章が、Papus, « Les diverses écoles officiellement représentées au congrès », *Compte rendu du congrès spirite et spiritualiste*, Librairie spirite, 1890, p. 66. に既に見える。

⁸⁴ Ferdinand Charles Barlet, « Occultisme et religion », *L'Etoile d'orient*, n° 7, 8, 9 et 10, 1908, p. 189.

ティズムと称呼してきたわけである。そして一時は途絶えたエリファスの衣鉢を継ぐべく、ベル・エポック、フランスのオカルティストたちは、神智学協会のインド風オカルティズムを換骨奪胎し、ユダヤ・キリスト教に基づきつつ西洋に根ざしたオカルティズムを構築していくことになる。しかしながら、神示の時点で永久に固定され世々相伝されていくべき宗教的伝統と、日進月歩と言えれば聞こえは良いが転変常なき現代科学とを折り合わせるという、エリファスとそれに続くオカルティストたちの主張にはどだい無理がある。科学が進歩と言うか変化するごとに、それに応じて伝統と整合的な説明をでっちあげなければならないオカルティズムの破綻は早晚避け難い形勢であった。マリー・キュリーの博士論文『放射性物質に関する研究』が刊行された1904年のこと、神殿聖杯カトリック薔薇十字団の頭首である「^{シャル}皇」ペラダンは、かつてエリファスがアストラル光と称した魔術の原理はその実放射線であったと断じて、ピエール・キュリーのソルボンヌ講演を機にオカルティズムの終焉を宣言してしまう。「放射能現象はこの上なく魔術的現象であり、1904年2月18日午後9時、進行役カジミール・ペリエ氏の下、キュリー氏は大奥義を開頭した。オカルトを修めた者にとって、永久に記念されるべきこの時日は神聖紀元を開いた。 […] イエス・キリストの御言葉を毀傷するどころか、新たなる科学の歩みは唯物論を打破し、数年の内に科学的方法は熱烈な唯心論へと転向するであろう⁸⁵。」放射線の発見によって物質概念を一新した科学は、仲介者たるべきオカルティズムを差し置いて、頑迷固陋の唯物論を投げうち公然宗教へと歩み寄っていくかのごとくである。もはやオカルティズムに何の益があるか。だがそんなことを言い出すのであれば、ファラデーまで遡らないにしても、1870年代にして既にウィリアム・クルックスは固体、液体、気体に続く物質の第四の状態として放射状態を提唱していたわけで、オカルティズムはエリファスとともに死産していたのでなければならぬはずである。

代表的オカルティストと目される人々によって度々その存在を否定されるとは、オカルティズムとは何と不思議な思潮なのだろうか。マルティニスム会最高評議会議員として斯界に位人臣を極めたヴィクトル・エミール・ミシュレは切って捨てて言う、「《オカルティズム》なる語には何の意味もない。《知識人》を僭称する現代の蛮族は、イスマで終わる名辞でもってレッテル貼りした体系を分類したがる。そんなものは術学者の与太でしかない⁸⁶。」

⁸⁵ Joséphin Péladan, « Le radium et la fin de l'occulte », *La Chronique des livres*, 1904, p. 10.

⁸⁶ Philippe Pagnat, *L'Occultisme et la conscience moderne*, Editions des Pages Modernes, s. d.,

結局オカルティズムという言葉自体は中に何も入っていない皮袋のようなもので、そこにオカルティストと自ら称する、世に称される人たちが各人各様でんでんに、あるいは盗んだ古酒を、あるいは自家製のどぶろくを、あるいは不気味な口噛み酒を持ち寄ったのが、ベル・エポックのように時宜を得て思想運動を醸成しめすれば、時ならで奇矯の人の世迷言と茶にされたり、時代が下ればサブカルチャーに取り入れられ俗に言うオカルチャーとして消費されたりしたというのが実のところではなかったろうか。かつちりとした結構を備え持った体系ではなく、融通自在に雑多な内容を呑みこみ同化してしまうオカルティズムという大きな入れ物を作り上げた、その機縁となったことは、それが当人の本願であったとは到底思えないのであるが、エリファス・レヴィ作品最大の意義の一つであった⁸⁷。

p. 34.

⁸⁷ ショーレムは『ユダヤ神秘主義大観』冒頭で「エリファス・レヴィの筆名で名声を博したアルフォンス・ルイ・コンスタンの絢爛豪華な誤読謬説」(Gershom Scholem, *Major Trends in Jewish Mysticism*, New York, Schocken Books, 1995, p. 2.) に言及している。少し後、ショーレムはフランス文« Un Dieu défini serait un Dieu fini » (*Ibid.*, p. 25.) を引いているのであるが、この文句の典拠は一般にエリファスの作であると考えられている。ところで同書のドイツ語版では、件の一文を「とある才筆のフランス人」が書いたとしているのであるが、これでは先の文中でエリファスをペテン師扱いしていることと整合性が取れないものごとくである (Cf. Saverio Campanini, « A Case for Sainte-Beuve. Some Remarks on Gershom Scholem's Autobiography », Rachel Elior and Peter Schäfer, *Creation and Re-Creation in Jewish Thought*, Tübingen, Mohr Siebeck, 2005, p. 380, n. 85.)。さて、エリファスの著作をひっくり返してみても、問題の引用句に完全に合致する文章は見当たらない。一番近いのが、「un Dieu défini est en quelque sorte un Dieu fini » (Eliphaz Lévi, *Secrets de la magie*, op. cit., p. 660)、「un Dieu défini étant nécessairement un Dieu fini » (Idem, *La Science des esprits*, op. cit., p. 7)、「Un Dieu défini c'est un Dieu fini » (Idem, *Fables et symboles*, op. cit., p. 327) 辺りであろうか。条件法にこだわるのであれば、「Dieu serait fini s'il pouvait être défini » (Idem, *Le Livre des sages*, op. cit., p. 106) も候補に入る。しかし上に見た矛盾に鑑みるに、ショーレムが直接エリファスから引用をしたとは考えにくい。ところでスタニスラス・ド・ガイタがマルティニスム会のイニシエーションに際して行った演説中に« Un Dieu défini est un Dieu fini » (Stanislas de Guaita, *Au seuil du mystère*, Chamuel, 1896, p. 155. 同文の初出は *L'Initiation*, juillet 1889, pp. 1-8.) という文章があって、それに脚注してエリファス・レヴィとだけ書かれている。先ほど挙げた文章のいずれかに少し手を加えたものである。動詞が条件法でないという瑕疵はあるが、ショーレムはこの脚注を見逃してしまい、迂闊にもペテン師呼ばわりした当の相手を孫引きしてしまったので、「とある才筆のフランス人」はガイタを指している、と推量される。